第Ⅱ部門

LES における動的境界モデルに関する研究

神戸大学工学部 学生員 北野 有哉 神戸大学大学院自然科学研究科 正会員 中山 昭彦

1. 序論

近年のコンピュータ性能の飛躍的向上に伴い,LES が実 用化可能段階に到りつつある.しかし依然として,LES に は境界近傍の格子幅を広く取ると境界近傍の流速が低くな るという問題がある.本研究はこの原因が境界近傍での粗 視化操作と微分操作の非互換性を無視していることにある と考え,互換誤差をモデル化,そしてモデルパラメータを 動的に与えることで,このモデルが適切に互換誤差を表現 し,理想的な値の境界近傍の流速を算出できると考えた.本 報はこの動的境界モデルの提案および,その有効性の提示 を目的とする.

 陽的フィルタリングによる LES 基礎方程式 まず格子幅 △ のフィルタ関数 G_→(x, ξ) を点 x を中心に 1/2 の範囲で一定の値 1,それ以外では 0 をもつ重み関数, w(x) を用いて以下のように定義する.

$$G_{\overline{\Delta}}(\boldsymbol{x}, \boldsymbol{\xi}) = \frac{w((\boldsymbol{x} - \boldsymbol{\xi})/\overline{\Delta})}{W_{\overline{\Delta}}(\boldsymbol{x})}$$
(1)

尚,フィルタ関数の性質上 $\iiint_D G_{\overline{\Delta}}(x,\xi) dV_{\xi} = 1$ となる為, $W_{\overline{\Delta}}(x) = \iiint_D w((x-\xi)/\overline{\Delta}) dV_{\xi}$ とする. D は流れ場全域 を示す.

この関数を用いてベクトルf(x)の勾配 $\nabla f(x)$ を粗視化したものは,以下のように展開できる.

$$\begin{aligned} \overline{\nabla f(x)} &= \iiint_{D} G_{\overline{\Delta}}(x,\xi) \nabla_{\xi} f(\xi) dV_{\xi} \\ &= \iint_{S} G_{\overline{\Delta}}(x,\xi) f(\xi) n dS_{\xi} \\ &+ \iiint_{D} \nabla_{x} G_{\overline{\Delta}}(x,\xi) f(\xi) dV_{\xi} \\ &- \iiint_{D} \nabla_{\xi} G_{\overline{\Delta}}(x,\xi) \overline{f(x)} dV_{\xi} \\ &= \iint_{S} G_{\overline{\Delta}}(x,\xi) \left(f(\xi) - \overline{f(x)} \right) n dS_{\xi} + \nabla \overline{f(x)} \\ &= \overline{f''(x)n}^{S} + \nabla \overline{f(x)} \end{aligned}$$

ここで S は粗視化前の境界面,n は粗視化前の 境界面に対する法線ベクトルである.また f''(x) $\left(=f(x)-\overline{f(x)}\right)$ は粗視化によって除かれた f(x) $O \overline{f(x)}$ に対する変動成分 (sub-filter scale) ,そして $\overline{f''(x)n}^S \left(= \iint_S G_{\overline{\Delta}}(x,\xi)f''(\xi)ndS_{\xi}\right)$ が粗視化前の流れ 場の境界面における f''のフラックス体積フィルタ平均で あり,先に述べた互換誤差である. この互換誤差を考慮して LES 基礎方程式を改めて導出 し直すと次のようになる.

$$\frac{\partial \overline{u}_{i}}{\partial t} + \frac{\partial \overline{u}_{i} \overline{u}_{j}}{\partial x_{j}} = -\frac{1}{\rho} \frac{\partial \overline{p}}{\partial x_{i}} + \nu \frac{\partial^{2} \overline{u}_{i}}{\partial x_{j} \partial x_{j}} - \frac{\partial \tau_{ij}}{\partial x_{j}} \\
+ \overline{u_{i} \overline{u_{j}} n_{j}}^{S} - \frac{1}{\rho} \overline{(p - \overline{p}) n_{i}}^{S} \\
+ \nu \left[-\frac{\partial \overline{\overline{u}_{i} n_{j}}^{S}}{\partial x_{j}} + \overline{\left(\frac{\partial u_{i}}{\partial x_{j}} - \overline{\frac{\partial u_{i}}{\partial x_{j}}}\right) n_{j}}^{S} \right]$$
(3)

ここに au_{ij} は SGS 応力である.

式 (3) の右辺第四項以降が互換誤差を考慮する項であり, 境界に接するセルの計算時にのみ必要となる.これらの項お よび τ_{ij} は非解像成分で表されている為, τ_{ij} は Smagorinsky 定数 C_s が 0.18 の標準 Smagorinsky モデルを用いてモデル 化し,式 (3) の右辺第四項以降の各項を以下のようにモデ ル化する.

$$\overline{\overline{u_i u_j} n_j}^S = -C_r \frac{\Sigma_{\overline{\Delta}}}{\overline{\Delta}} |\overline{\boldsymbol{S}}| \frac{\partial \overline{u_i}}{\partial x_j} \overline{n_j}$$
(4)

$$-\frac{1}{\rho}\overline{(p-\overline{p})n_i}^S = C_d \frac{A_{\overline{\Delta}}}{\overline{\Delta}^3} |\overline{u}|\overline{u_i}$$
(5)

$$\nu \left[-\frac{\partial \overline{\overline{u_i} n_j}^S}{\partial x_j} + \overline{\left(\frac{\partial u_i}{\partial x_j} - \overline{\frac{\partial u_i}{\partial x_j}} \right) n_j}^S \right] = C_f \frac{\Sigma_{\overline{\Delta}}}{\overline{\Delta}^3} |\overline{u}| \overline{u_i} \quad (6)$$

モデルパラメータの決定に際しては, Germano *et al*¹⁾ に よって提案された動的手法を応用して Germano identity の 形を導出し, Lilly²⁾ による最小二乗法を用いて毎時 · 各点 で算出した.詳細については北野³⁾を参照して戴きたい.

このモデルは流れ場 境界近傍の局所的性質を表現していると思われ,応力の次元をもつことから,この平方根を境界面上の流速として与え,シミュレーションを行った.計算対象はx, y, z方向に長さ3H, H, 1.6H,x-z方向に周期境界をもつ領域で,格子数 $60 \times 88 \times 32$ のDNS, $60 \times 20 \times 32$ の標準Smagorinskyモデル(以下SM)のみを導入したLES,およびSMに今回導入するモデルDBMを加えたLESの三種のシミュレーションを,全て,水深と壁面摩擦速度に基づく Re_{τ} を180,無次元時間刻み幅0.002で行った.

3. 結果

図-1-図-6 に平均流速分布,レイノルズ応力分布,及び乱 流強度分布の計算結果を示す.Yokojima は Re_{τ} を 180 と して格子数 116 × 96× 128 で行われた DNS 結果⁴⁾である.

Yuya KITANO, Akihiko NAKAYAMA



図-3 乱流強度分布 (DBM)

本研究の DBM により境界一点目の流速が理論値に近付 き,DBM を除いては標準 Smagorinsky モデルしか用いな いにも関わらず,流れ場全域に対してかなりの再現性の改 善を確認できる.DBM の性質上,機能しているのは境界 ごく近傍,実質的には境界一点目のみであることから,こ れまで境界一点目の流速を低く見積もる原因は,乱流モデ ルによる強い抑えの効果の為だけだと思われていたが,非 互換性を無視し,考慮すべき流速の一部を無視していたこ とにもあるということができる.そして境界近傍の流速を 正確に予測できれば,少なくとも開水路を対象とする場合, 基本モデルを標準 Smagorinsky モデルとしたまま十分正確



図-4 平均流速分布 (SM) (破線は理論値)







に流れ場全域を再現できるものと考える.

参考文献

- 1) M.Germano, U.Piomelli, P.Moin, W.H.Cabot: A dynamic subgrid-scale eddy viscosity model, *Phys. Fluids A*, Vol.3, No.7, pp.1760-1765, 1991.7
- 2) D.K.Lilly: A proposed modification of the Germano subgrid-scale closure method, *Phys. Fluids A*, Vol.4, No.3, pp.633-635, 1992.3
- 北野 有哉: LES 解析における動的境界モデルに関する研究, 神戸大学工学部卒業論文,2006.2
- 4) Yokojima, S.: Modeling and Simulation of Turbulent Open-Channel Flows Emphasizing Free-Surface Effects, *Kobe University Doctor of Engineering*, 2002.